

明治大学大学院文学研究科

2018年度

博士学位請求論文

(要約)

支援者支援学の構築に関する研究
—共感疲労概念を中心として—

The Construction of supporter's support studies :

Focusing on the Concept of Compassion Fatigue

学位請求者 藤岡 孝志

目次

要約..... 1

1 問題意識と目的..... 1

2 本論文の要約 2

 1、本論文の構成 2

 2、本論文全体の要約..... 3

要約

1 問題意識と目的

支援者支援に関する研究領域を構成する概念に、共感疲労がある。共感疲労とは、支援者の側の「クライアントと一緒にトラウマティックな出来事を再体験している時に生じる緊張と不安、及び、無力感、混乱、支援からの孤立の感覚」（Figley, C.R. 2002）である。共感的理解をその基本的な臨床技法としているほとんどの支援者が、この共感疲労に対する対処を求められていると言っても過言ではないだろう。しかし、そのメカニズムや測定方法の検討、及び臨床的な支援技法としての吟味については、これまで十分には行われてこなかった。支援者の疲弊あるいは休職・離職等への対処にとどまらず、安定した一定の支援成果を維持するためにも、支援者支援の観点は重要であり、様々な臨床領域において、常に意識されていなければならないことである。臨床活動を支える一つの学問領域として、支援者支援学が求められるゆえんでもある。

本論文では、支援者支援の他の概念との異同などを精査したうえで、共感疲労概念の独自性を明らかにしていく。その上で、支援者の特徴として、共感疲労の示し方に一定のタイプがあり、そのタイプに則った対処方法を精選させていくことで、支援者としての最適な共感疲労の状況に自己調整でき、その支援者に合わせた支援者支援が行われていくものとする。そして、そのような支援者一人ひとりに合わせたテイラードサポートによる支援を、共感疲労を中核に据えた支援者支援プログラムとして構築することが本論文の最終的な目的となる。

本論文は、上記のような目的を踏まえ、以下の10点を検討した。1) 支援者支援の諸概念（バーンアウト等）の概観、2) 共感疲労概念の独自性の検討、3) 共感疲労尺度の吟味、作成、4) 共感疲労尺度を用いた支援者の特徴、5) 共感疲労と支援者支援・自己支援項目との関係性、6) 支援者の特徴としての共感疲労の高低を踏まえた、支援者として最も機能する状態の保持の検討（支援者の最適化水準モデルの提唱）、7) テイラードサポートを基礎においた支援者支援プログラムの構築の検討、8) これらのプログラムの適用の事例としての、児童養護施設での支援者支援実践、9) 支援者支援の中核に、共感疲労を据えることでの、様々な臨床アプローチ共通の「支援者の自己モニター及び他者モニター」プログラムの構築。そして、最後に、10) 今後の支援者支援の在り方について、上記を踏まえて提言を行った。これらのことによって、技法に関わりなく、支援者支援の重要性が今後ますます、臨床領域で広がることが期待される。

2 本論文の要約

1、本論文の構成

本論文は、以下のように構成する。

序章 はじめに。第1章 問題の背景と本研究における問題の所在、第1節 問題の背景、第2節 学問的な現状と位置づけ支援者支援学の必要性、第3節 問題の所在。第2章 本論文の構成 第1節 本論文の構成、第2節 本論文の概要。第3章 支援者支援の諸概念、第1節 支援者支援研究の初期段階、第2節 支援者支援学あるいは援助者支援学、第3節 支援者支援学を構成する諸概念。第4章 共感疲労研究の概観、第1節 共感疲労研究の概観、第2節 日本における共感疲労研究、第3節 日本における共感疲労研究の小括、第4節 総合考察、第5節 概念の定義。第5章 支援者支援における諸概念との関係における共感疲労の独自性の構築、第1節 本研究の目的、第2節 方法、第3節 結果、第4節 考察。第6章 日本版共感疲労共感満足自己テストの開発、第1節 調査研究の概要、第2節 本研究の目的、第3節 方法、第4節 結果、第5節 考察。第7章 共感疲労尺度の再構築と、それに伴う支援者支援の可能性、第1節 本章の目的、第2節 方法、第3節 結果、第4節 考察。第8章 共感疲労の『最適化水準モデル』について、第1節 本章の概要、第2節 共感疲労におけるプロセス・モデル、第3節 共感疲労研究の展開—デザインメント概念について—、第4節 共感疲労の最適化水準モデル仮説の提案、第5節 調査 共感疲労の最適化水準の内容について、第6節 共感満足の最適化水準モデルの構築、第7節 共感疲労タイプの時系列分析、第8節 共感疲労の支援者の機能（ファンクショニング）への影響、第9節 共感疲労を中核にした支援者モニタリングシステム及びテイラードサポートの構築について、第9章 支援者支援の実際、第1節 支援者支援の実際—施設内研修で伝えることの要点—、第2節 施設臨床における支援者支援プログラム、第3節 施設臨床における支援者支援プログラムの実際—施設支援・個別支援・グループ支援—、第4節 考察。第10章 総合考察と今後の支援者支援学の方性に関する提言、第1節 これまでの各章を踏まえた総合考察、第2節 本論文の目的に関する考察、第3節 本研究の到達点と限界、第4節 今後の支援者支援学の方性に関する提言、第5節 支援者支援学における今後の課題。終章 おわりに。

2、本論文全体の要約

まず、序章及び第1章において、支援者支援の必要性について検討し、支援者の置かれた状況を鑑み、問題の背景と問題の所在を記述した。序章「はじめ」、第1章「問題の背景と本研究における問題の所在」となる。

序章 はじめ

序章「はじめ」において、以下のように、「支援者支援学の構築」というテーマの学問的意義について整理した。

1、支援者支援学を構成する理論や概念は何か。

それは、バーンアウトや共感疲労などのこれまで独立していた概念の羅列では決してなく、支援者支援学の根幹に立つ理念や概念、そしてそれらの概念間の関係性を明確にした体系が求められる。その中で特にバーンアウトと共感疲労の関係性の解明も本論文の大きなテーマである。複数の概念を包括した、「学としての支援者支援学」の体系化が求められる。

2、支援者支援学を構成する概念のそれぞれの特徴や関係性を踏まえた活用や実践

上記のような基底理論も、それぞれの概念の研究だけではなく、実践現場で併用したり、支援者の実践者としての職能発達の時期によって、あるいは対象者によって適用概念を精査したり、活用方法を変えたりすることの実証的な研究をもってして初めて実現するものとなるであろう。すなわち、支援者支援学に基づいた実践の理論も併せて構築されなければならない。

3、適用範囲の領域固有性と領域汎化性

適用範囲の領域固有性と領域汎化性も重要なテーマである。心理、福祉、教育、司法、医療、看護などの領域で、これまで多くの研究がなされてきたが、領域固有性と領域汎化性は、支援者支援学という、より大きな学問体系の中にあってこそ実現するものである。スタンダード版と領域固有版の適用の検討が必要となる。本論文ではその主たる対象を、子ども家庭福祉領域というフィールドとしているが、無論この研究の方向がそのフィールドだけに限定されるとは考えていない。一フィールドで構築された知見が、必ずや他のフィールドへと敷衍されるであろう。

以上の3つの観点を念頭におきながら、筆者は、本論文で、「支援者支援学」の構築をめざす。様々なテーマ、リサーチクエスションの実証も目的であるが、その到達点は、新しい学問の構築である。

第1章 問題の背景と本研究における問題の所在

次に、本論文における「問題の背景と本研究における問題の所在」を明確にした。そして、そのことが、臨床心理学において、その発展にどのような意味を有しているかを検討

した。その上で、再度、支援者支援学の構築が持つ意味について検討した。

まず、第1節 問題の背景 として以下の点を整理した。1、福祉現場の置かれている状況、2、支援者支援の現状―「支援者の傷つき」としての二次的なトラウマティック・ストレス・共感疲労、3、「支援者」支援の意義、である。その上で、第3節において、問題の所在について取り上げた。以下、その概要である。

本要約における問題意識と目的においても述べたことであるが、支援者支援に関する研究領域を構成する概念に、共感疲労があるが、共感疲労とは、支援者の側の「クライアントと一緒にトラウマティックな出来事を再体験している時に生じる緊張と不安、及び、無力感、混乱、支援からの孤立の感覚」(Figley, C. R. 2002) である。共感的理解をその基本的な臨床技法としているほとんどの支援者が、この共感疲労にへの対処を求められていると言っても過言ではないだろう。しかし、そのメカニズムや測定方法の検討、及び臨床的な支援技法としての吟味については、これまで十分には行われてこなかった。支援者の疲弊あるいは休職・離職等への対処にとどまらず、安定した一定の支援成果を維持するためにも、支援者支援の観点は重要であり、様々な臨床領域において、常に意識されなければならないことである。臨床活動を支える一つの学問領域として、支援者支援学が求められるゆえんでもある。

その意味でも、支援者支援の他の概念との異同などを精査したうえで、共感疲労概念の独自性を明らかにしていくことが必要である。その上で、支援者の特徴として、共感疲労の示し方のタイプや、そのタイプに則った対処方法の精選で、支援者としての最適な共感疲労の状況に自己調整でき、その支援者に合わせた支援者支援が行われていくものと考ええる。そして、そのような支援者一人ひとりに合わせたテイラーサポートによる支援を、共感疲労を中核に据えた支援者支援プログラムとして構築することが、本論文の最終的な目的となる。以上、本研究における問題の所在をまとめた。

第2章 本論文の構成

第2章では、本論文の全体構成を記述し、論文全体を鳥瞰できるように配慮した。その上で、先行研究の概観をした。第3章と第4章で構成される。

第3章 支援者支援の諸概念において

第3章では、支援者支援で取り上げてきた諸概念を概観した。バーンアウト、感情労働、二次的トラウマティック・ストレス、共感疲労、共感満足、代理トラウマ、心的外傷後成長、レジリエンスの8つの視点からである。その際、第5章にもつながるように、各概念の相違点、類似点を整理した。第3章は、以下のように構成される。第3章 支援者支援の諸概念、第1節 支援者支援研究の初期段階、第2節 支援者支援学あるいは援助者支援学、第3節 支援者支援学を構成する諸概念、となる。

第4章 共感疲労研究の概観

第4章では、共感疲労研究の概観を行った。まず、海外の共感疲労研究を概観した。共感疲労概念の構築者であるフィグリー教授と議論してきた共感疲労研究の系譜についても意識をしながらまとめていった。以下の5つの視点である。1) 共感疲労の概念そのものを検討した研究、2) 共感疲労の測定に関する研究、3) 共感疲労の支援諸領域の違いによる差異について、4) 共感疲労対策についての研究、5) 共感疲労対策のための研修や支援プログラムに関する研究、の5点である。その上で、日本における共感疲労研究を概観した。日本においては、小西聖子がスタムの編著文献の翻訳に際して、共感疲労という訳語を初めて用いたのが、日本における共感疲労研究の出発点である。その時期と相前後して、バーンアウト概念にとどまらず、共感疲労や類似の概念を活用した支援者支援の実践に関する研究が見られはじめ、その後、多くの日本の臨床家、研究者による児童養護施設等での調査研究や実践報告などが続くことになるが、それらを概観した。諸概念については、第5節において、それまでの先行研究の概観を踏まえて、代表的な定義をのせ、本研究での概念使用の基本的な立場を明確に提示した。第4章 共感疲労研究の概観、第1節 共感疲労研究の概観、第2節 日本における共感疲労研究、第3節 日本における共感疲労研究の小括、第4節 総合考察、第5節 概念の定義、となる。

その文献概観から見てきたのは、いまだ共感疲労の概念が特定化されていないという危惧と、共感疲労を少なくすればそれが支援者支援につながるという安易な臨床現場への適用である。筆者は、共感疲労には最適な水準があり、支援者それぞれによって共感疲労の度合いは違うと考えている。共感疲労がいつも高い人もいれば、いつも低い人もいる。その自分の特徴を理解したうえで、最も自分の支援者としての力が発揮できるように自己調整あるいは他者への助力を求めることなどが支援者支援の真骨頂であると考えている。共感疲労を低くすればよいということではない。その点で、共感疲労概念構築の貢献者であるフィグリー教授の考え（共感疲労の低減を一義的に目指すという「共感疲労低減による支援者支援」）とも一線を画している。共感に伴う疲労感をネガティブにとらえるのではなく、むしろ、それを支援者の宿命として受け入れ（受容し）、主体的に自己調整をしていく、あるいはそのような支援の場の構築を志すことが、筆者の考える支援者支援である。その際、クライアントあるいは利用児者のウェルビーイングのために、支援者が自己調整していくこと、及びそのための支援者支援が重要となる。本論文で実証すべき点はこの点である。

第5章 支援者支援における諸概念との関係における共感疲労の独自性の構築

以上を踏まえ、まず、第5章では、支援者支援における諸概念との関係における共感疲労の独自性の構築を試みた。児童養護施設職員の方々に、支援者支援諸概念に該当する自由記述を依頼し、質的な解析を行った。その結果、共感疲労が、支援者として、施設の子どもたちやその親によって侵襲され、その傷つきや疲弊（暴言や暴力、あるいは子ども同

士の喧嘩の目撃、虐待者である親との面談による受傷等）から来ていること、また、同僚の支えがないことにより、PTSDの生成過程と同様に、共感疲労の深刻化を招いていることを見い出した。特に、過去のトラウマ体験の再燃が起きている場合、共感疲労のリスクは高くなる。その対処が、共感疲労を対処可能な水準に維持することにつながり、支援者としての機能の維持につながることも示唆された。

第6章 日本版共感疲労共感満足自己テストの開発

第5章を踏まえ、第6章「日本版共感疲労共感満足自己テストの開発」において、これまでの筆者の共感疲労に関する実証研究をまとめなおし、筆者の仮説である、支援者の最適化水準モデルを検証する一助とする。日本版共感疲労共感満足自己テストの開発にあたっては、共感疲労概念を最も忠実に反映していると考えられるフィグリー・スタムの原版の因子分析解析によって、短縮版共感疲労・共感満足自己テストを開発した。共感疲労は、二次的トラウマ、PTSD様状態、否認、過去のトラウマ体験の再燃の4因子、共感満足は、仕事仲間との満足、利用児者との満足、支援者としての技能等への満足、人生全体への満足の4因子が見いだされた。この研究成果によって、共感疲労及び共感満足の年度ごとの自己チェックが可能となり、健康診断のように支援者としての自己モニターができるようになった。

第7章 共感疲労尺度の再構築と、それに伴う支援者支援の可能性

さらに、第7章「共感疲労尺度の再構築と、それに伴う支援者支援の可能性」において、これまで作成されていた共感疲労に関する尺度をすべて丹念に検討した。すなわち、原版ともいべきフィグリーによる30項目の共感疲労尺度から、共感満足を交えたフィグリー・スタムによる共感疲労・共感満足自己テストへの変遷、さらに、スタムによるPro-QOLの開発まで、質問項目を比較検討していった。その結果、現在世界で最もよく使われているスタムによるPro-QOL尺度の概念的な曖昧さ（共感疲労概念へのバーンアウト概念の混入等）が示唆された。一方で、第6章で検討・開発した共感疲労・共感満足自己テスト（短縮版）が、フィグリーによる共感疲労概念に忠実に依拠していることを確認することができた。

第8章 共感疲労の「最適化水準モデル」について

第8章第1節から第7節において、「共感疲労の最適化水準モデル」を検証していった。200名を超える児童養護施設職員の共感疲労の数値が、低群、中間群、高群の大きく3群に分かれることが見いだされ、それぞれ、「柳に風タイプ」、「中間タイプ」、「横綱相撲タイプ」と命名した。このうちの「横綱相撲タイプ」が他のタイプに比べて、有意にバーンアウトリスクが高く、支援者支援では、この横綱相撲タイプにまず焦点を当てて支援しなければならないことが見いだされた。第7節「共感疲労タイプの時系列分析」では、

それぞれのタイプが、時間の流れによって変遷するか、固定したものかということを見出すために、年度を超えて同一の支援者群への共感疲労等尺度の解析を行った。その結果、年度が異なってもその相関が、共感疲労の合計点だけでなく、複数の下位尺度においても0.8前後できわめて高いとの結論を得た。施設の状況や子どもたちのメンバー入れ替えなどがあったとしても、支援者の共感疲労は各自一定の水準で保持されており、『共感疲労の最適化水準モデルによる支援』の必要性が示唆された。すなわち、一律に共感疲労を低くする支援ではなく、その共感疲労の度合いによる支援者支援の工夫をし、いうなれば支援者へのテイラードサポートしなければならないのである。**第8節「共感疲労の支援者の機能（ファンクショニング）への影響」**では、共感疲労の度合いと、実際の養育行動の関係性を検討した。その結果、共感疲労が高くなればなるほど、支援者のネガティブな養育行動であるFR行動（おびやかす/おびやかされる行動）が亢進し、疲れてくると不適切な行動につながる可能性が示唆された。それぞれの共感疲労の最適化水準を保持し、ネガティブな支援者行動にならない配慮が必要となる。**第9節「共感疲労を中核にした支援者モニタリングシステム及びテイラードサポートの構築について」**では、これまでの研究を踏まえ、実際に、施設職員等への支援者支援をおこなう上でのプログラムについて提言をした。

第9章 支援者支援の実際

第9章「支援者支援の実際」では、このような実践を前提とした基礎研究の成果を踏まえ、実際の支援者支援を、事例を通して検討する意義を論じた。まず、施設全体に対する「児童養護施設での支援者支援」について、概要を検討した（第1節 支援者支援の実際—施設内研修で伝えることの要点—、第2節 施設臨床における支援者支援プログラム）。その上で、施設における支援者支援の尺度を適用し、それをどのように生かすのかということを一施設の事例を通して検討した。なお、施設が特定化されないように、ここでは一施設事例として取り上げた。それについてまとめた第3節「児童養護施設での支援者支援（施設支援・個別支援・グループ支援）」では、まず、施設全体への支援に触れたうえで、個別支援のフォーマットの例も提示し、それらを踏まえた、施設内での集団支援の事例として、児童養護施設の新人層、中堅層、管理職層のうちの中堅層に対するグループ面談を行った。その結果、それぞれの経験年数によって抱えている課題は異なり、個々人への支援だけでなく、グループ層へのターゲットを絞り込んだうえでの支援が必要であることが示唆された。共感疲労の度合いが高くても、同僚や上司によって支えられていることが共感疲労の意味づけを変え、主体的に対処できる共感疲労へと変化していく。すなわち、共感疲労は、尺度によって個別的な傾向を見ることができるだけでなく、主体的な対処によって、むしろ、支援者としての支援の質（あるいは養育の質）を保持する役割を果たしていると考えられた。

第10章 総合考察と今後の支援者支援学の方方向性に関する提言

そして、第10章「総合考察と今後の支援者支援学の方方向性に関する提言」では、これまでの成果を踏まえ、今後の支援者支援学の在り方について考察した。本論文では、共感疲労を中核に据えたが、バーンアウト、感情労働、代理トラウマ、心的外傷後成長、レジリエンスなど、その中核に据えるべき概念は他にもある。ただ、共感疲労概念であるからこそ見い出せた支援者支援の観点がある。このように、それぞれの概念がその独自性、有益性を吟味したうえで発展することこそが、支援者支援学という学問体系の全体像の発展につながるものと期待される。そして、以下の5点の観点から、包括的な視点からの考察を加えた。1、共感疲労の尺度の作成及びその尺度適用から見えてきた、施設職員の共感疲労の実態、2、共感疲労や二次的トラウマティック・ストレス、共感満足の要因となる事象の検討、3、共感疲労等の実際の支援者の支援の質への影響、特にFR行動への影響やバーンアウト等への影響、4、支援者の中での個別的なタイプの違い、及び共感疲労の最適化水準モデル、5、支援者支援項目がもたらす共感疲労等への影響、6、共感疲労を中核に据えての支援者支援の実際、である。また、本論文の限界点にも言及した。

その上で、支援者支援コーディネーター及び支援者支援スーパーバイザーの存在が支援者支援の要になるとの提言を行った。支援者支援コーディネーターとは、「施設・機関内の職員であって、支援者支援について調整する職務を有するものである。その者は、支援者支援に関する知識の学習あるいは研修を受け、かつ支援者支援の技法についても習熟した者である。その職務の遂行に当たっては、施設・機関内外の職員と連携し、チーム（チーム児童養護施設、チーム乳児院、チーム母子生活支援施設、チーム児童自立支援施設、チーム児童心理治療施設、チーム児童相談所、チーム子ども家庭支援センター等）として活動できるように、常に配慮ができることが重要となる」と位置付けた。

支援者支援スーパーバイザーについては、「複数の施設・機関に関わる専門家であって、支援者支援について支援者及び支援者支援コーディネーターに対して助言する者である。その者は、支援者支援に関する豊かな見識と知識を有し、かつ支援者支援の技法についても支援者あるいは支援者支援コーディネーターに助言できる者である。その職務の遂行に当たっては、施設・機関内のコーディネーターとよく連携し、その施設・機関がチームとして活動できるように助言できることが重要となる」と位置付けた。このような職務をどう精緻化し、育成していくかということは今後の課題である。

最後に、第5節 支援者支援学における今後の課題として、以下の5点を整理した。1、支援者支援学を構成する理論や概念は何か、2、支援者支援学を構成する概念のそれぞれの関係性や活用などの実践、3、適用範囲の領域固有性と領域汎化性、4、ミクロレベル、メゾレベル、マクロレベルの観点からの支援者支援、5、支援者支援の時系列分析の必要性、を指摘し、終章へとつなげた。

終章 おわりに

終章では、支援者支援の意義について改めて触れ、支援者支援を強調することで、肝心の支援者の磨くべき技法やアセスメントに必要な知識の獲得がおろそかになっては、本末転倒であることを指摘した。その上で、『支援者支援技法』、『自己支援技法』という言葉はいまだ十分には確立されていないが、今後さらに注目されていくべきであろうと展望を述べた。さらに、日本人の支援者としてのメンタリティが、海外、特に共感疲労研究が発展したアメリカと大きく違うという点にも触れた。

本論文で取り上げてきた、支援者の安定感やぶれない軸を持つ支援者の姿は、支援者支援を行う人（支援者支援コーディネーターや支援者支援スーパーバイザー等）の姿にもつながることであろう。支援者支援学の体系と実践技能を駆使して支援者を支援する人を、さらに支援する「支援のシステム」である。『支援の輪』ともいうべきこのネットワークは、これからの支援者支援学の発展にとって、大きなテーマでもあり、また、実践課題であるとも考えられる。このことを記して、本論文の、終わりとした。